

教育実習についての報告

——新しい方式とその反省——

織 田 長 繁

ま え が き

教育学部学生36名（内4年生2名 3年生34名）が本校において行った本年度の教育実習は、実習そのものについての考え方において昨年度までとは趣を異にするものであり、実施の方法においても違ったものがあった。今ここにその実際を記して将来の参考としたい。ただし、記された内容は研究ではなくて実践報告の段階でしかないことを諒解してほしい。

なお御協力頂いた全教官、就中学部と本校の教育実習の先生方に御礼を申し上げます。

I 昨年度までの教育実習

ここ数年間教育学部学生について本校で実施してきた教育実習の特色は、観察・参加の過程を重視してこれを段階的に進め、この過程で発見し又は生じた問題はできるだけその段階で解決し、それらの総合としての実習授業を次の過程として行うことにあった。この目的を達する方法として、前期を観察・参加として4月中旬から6月末までの毎週水曜日午後4時～5時計10～12回をこれに当て、後期は9月第1週6日間を全日授業中心で実習することになっていた。同1教生を2回に分けて内容と方法を異にする指導方式をとっているものは、全国の付属中学校において例を見ないように思われる。^{注1}

前期後期を通じて教生は予め提出した希望に基づいてまず教科が決定され、次いで学級に配属される。教科においては決定された指導教官の指導によって実習を行い、学級では配属された学級の担任教官を指導教官として生活指導の指導を受ける。教科と学級の決定は全員の希望がそのまま達せられるとは限らなかった。それは1教科（最近では英語）に希望が集中すること、学級数が少ないことに基づいている。

この方式の実習にもいくつかの問題点がある。その大部分はそれぞれ前年度の反省を基として指導してきたが十分に解決されてはいなかった。その中心となる内容を教育実習日誌・反省会・総合反省会の結果から、教生の立場を中心にまとめると概略次の如くなる。

る。

1. 毎週1回午後だけでは同1の学級・教科の継続的観察ができてにくい。
2. 時間が午後だけに限られるので生徒との接触が少なく、なかなか親しめない。また夏休みが中間にあるので、せっかくできた親しみも薄くなり易い。
3. 研究テーマの資料が集めにくい。^{注2}
4. 教科については第1希望が必ずしも生かされず第2第3の希望へ廻される。
5. 総合的な実習としては後期の1週間は短かすぎて十分な成果をあげにくい。

これらに対する指導は省略するが、教科指導に重点を置きながら教生にはできるだけ生々しい実際の具体的な問題を体験させ、その中から人間関係の1部面を実感的に把握させる立場をとっていたのである。その結果は十分とは言いきれないが一応目的を達したと考えられる。^{注3}

II 本年度の教育実習

一、新しい教育実習への動き

しかし例年生じているのと同じ性質の問題が36年度においても取り上げられたので、根本的な再検討の必要を認めた。実習終了後、教育学部教育実習委員の教官2名の参加を得て、全教官による研究会議に教育実習のあり方を提案して各教官の意見を徴した。結論までは求めなかったがその主な意見は次の通りである。

1. 毎年1回午後の観察中心の過程は、十分な効果もあがりにくいので、これを何等かの形に改めるのが妥当ではないか。
2. 教科中心でなく学級中心の指導にしてはどうか。

上の意見を基礎とし本校の運営委員会・教育実習委員会において種々検討した結果、前年度までの方式を改め連続2週間の実習とし、実施の時期は学部の前期試験終了直後からとする案を立てた。この案は教官会議で審議され学部教授会でも認められたので、引き続き教育実習委員会において、学部出身者のうち教職につ

く者が極めて少数である現実を考慮して、本年度の実習についての方針を次の如くに決定した。

1. 教育実習は、教科の実習でなく教育の実習とする。
2. 教生は学級に配属し、学級担任の指導により学級を通じて実習を行う。
3. 教科の指導はその学級の教科担任教官の指導を受ける。
4. 学級毎に研究課題を設定しその成果を発表する。

即ち前年度までと大巾に異なる所は、あらゆる点を学級中心に求めたことである。具体的に云えば教生は学級に配属され、その学級で生活指導・観察・参加・実習授業などのすべての活動を展開することになる。学級配属の方法は研究テーマを同じくするものによって決定し、教生相互の話し合いと実習委員会によって細部の調整を行う。教科はその学級に所属した教生の協議によって決定し、その学級の教科を担当する教官を指導教官とする。ただし某教官が(多くの学級をを担当するために)指導する教生が多数になった場合には実習委員会で調整する。

研究課題については前年度は個人研究の立場をとったが、その意図の徹底を欠いた憾みもあったので、今回は学級毎の協同研究^{注4}の方式をとった。課題の内容は実習委員会で作成したものに附属全教官および学部教官に依頼したものを参考にして29題を例示し(別表1)、その他教生自らが作ったテーマでもよいこととした。その成果は実習最終日に研究発表会を設けて発表させ検討させることにした。

先にのべた4方針を軸にした具体的な実習指導案(別表2)で前年度と異なる所は、研究課題の選定・検討・決定と希望教科の検討・決定であり、前者において学部教官の参加を依頼したのは新しい試みである。その他教官の研究授業の代りに「授業説明指導会」の形でこれを実施して学習指導案についてもこの機会に教科毎に触れることとし、実習の終りに行う教生の研究授業を止めたことである。また実習期間内に文化祭とその準備を取り入れたのは、この機会に教室外での活動の面で見られるいくつかの問題点を教生に経験的に把握させる目的をもつものであった。

この計画案は本校の教官会議で審議された後教授会の承認を得た。

二、教育実習の実施

実習は計画案に従い36名の教生について10月25日から実施された。オリエンテーション、テーマによる学級グループの編成、グループ内における教科の話し合いと決定、グループテーマの研究計画の立案・検討・

決定(学部教官の指導による)・学部教官による心理テストのオリエンテーションが4日間に、観察と併行して進められた。新しい環境の中で、しかも短時間に次々と決定実施しなければならない仕事に忙殺されて、教生の不満が実習全体の目標を見失わせるかの情態さえも見え出した。しかし教生のもつ意欲的で誠実な教育への情熱^{注5}は、グループ毎の検討や全体の協議^{注6}によって方向付けられ精力的な活動が展開した。授業と教材研究、文化祭行事準備への参加の間をぬって資料の収集整理が次々に行われた。授業は第4日目午後から自己の学級で平均3時間程度を行なった。文化祭行事については、学級担任の指導によってその立案企画諸準備に参加した。文化祭は2日間にわたったが、両日共午前中は行事に参加させ午後は研究のために自由参加の形をとった。研究発表は実習最終日に行い、将来経験するであろう諸種の発表会に慣れさせることから1グループ20分(発表15分、質疑討議5分)で進め、10グループが次々と研究成果を発表した。その内容(別表3)は学習関係のもの2、学級集団又はその運営等に関するもの7、その他1となっている。

Ⅲ 評価と反省

2週間にわたった新しい方式の教育学習がどのように受けとめられたかについて、いくつかの問題にしばらくして教師と教生と生徒の3者の立場から眺めてみよう。調査はそれぞれアンケートによったが、教官の場合には全教官(別表4)・学級担任・教科担当に分けたために後の2者は回答数が少ないので、その数字は省略する。

一 教師の立場から

1. 教生の活動を学級中心にしたことは成功したとは云えるが、それにもかかわらず生徒把握の状態が「普通」換言すれば例年と変わりないと学級担任から判断されたことは、観察の方法やその他の指導について一考を要するものを含んでいると云えよう。
2. 実習期間中に何等かの研究を課したこともよいと判断されている。これは授業だけが実習ではないとする裏付けの1資料にもなると考えられる。教生が非常に多忙であったにもかかわらず、教材研究の程度が普通または少しよいとする回答がほとんど全員から得られたのは、教官の適切な指示もさることながら教生の授業に対して抱いている熱意を認めないわけにはいかない。この熱意については、教生に対するアンケートの中でも最も力を注いだ6項目の第2位に「授業」が入っていることからみてもうなづけることであろう。

3. 実習期間中に文化祭を取り入れたことについては態度保留が多い。その理由はアンケートの結果だけでは、授業時数が行事で減少するからではないかと考えられる節がある。教科担任からの回答によると授業時数の不足は1名を除いた全員が強く訴えている。この点については傾聴すべき批判や意見が少くない。^{注7}
4. 学級担任の立場からみて、(1)学級担任として指導し易かったか否か (2)教師の計画に則して指導できたか否か (3)教生と生徒の接触の程度 (4)教生の生徒把握の程度は何れも普通またはよいとする結果が出された。(3)と(4)は過半数の担任が「よい」又は「非常によい」と答えている所から、1部の学級を除いては妥当な結果が得られたのではなかろうか。(1)(2)については「少しよい」程度であるので学級中心方式そのものの指導が十分に果されていなかったとも考えられる。

二 教生の立場から

別表5に見られるように学級に配属されたことと研究課題を与えられたことは、よいと明白に判断される。調査の3その他の1で「仕事が多すぎる・時間がない」と悲鳴をあげながらも、実習の方針を理解したことは教生の良識を高く評価したい所である。しかしテーマ決定の方法や教科決定法に関しては慎重に再考する必要があると認められる。実習日誌には、オリエンテーションを早く実施してほしかったとする声が非常に強い。オリエンテーションを早くする必要は認められるが、教生が大学で受ける前期試験との関係、希望するテーマと教科をどのように一致させるか等についての考察も必要と思うので、オリエンテーションの時期と内容については今後の課題として研究したい。

授業時間が少ないとする意見は教官側と同じように教生自身も強く持っている。授業を重視すれば昨年度までのものと大差がなくなるおそれもでてくるので、要は実習の中で授業の持っている意義又は授業そのものの位置付けをどのように決定するかによって解決される問題であろう。また諸行事を実習期間から除外するのも解決の1方法と思う。しかし行事自体やその準備段階がもつ教育的意義もまた大きいので、今後の宿題としておきたい。「テーマ例の内容」に関する数字の配分はきれいである。「大学の講義と密接な関係のあるものにしてほしい」「学級中心に問題をしばってほしい」とする意見、「内容が狭い、学校運営経営に関するものがあってもよい」などさまざまな意見が提出されていること、心理学的テストは別の機会に実施すべしとするものが多かったことを付記しておく。

三 生徒の立場から

教生と生徒の関係は別表6に表われた各種の数字をそのまま平面的に見て判断するのはどうであろうか。複数の教生が1学級に配属され、その教生たちの性格とそこから生れてくる指導法や生徒への接触のしかたは、自と異っているものであるし、また学級自体がもつ雰囲気や性格も全部が同じものではない。相互に異ったもののグループによってかもし出される人間関係の諸面を1連の数字を比較しただけで果して十分な意味があるか否や不安に思う。しかし一応このことを念頭において検討することにした。

3学級を除いて他の7学級は過半数の生徒が多少とも親しみを感している(別表6の(1))、それだけに教生からなにがしかを感じ取っていることは明瞭である(別表6の(2))。その内容が何でありどの程度であるかはなかなか見究めにくいと思う。特に高1Aは非常な感銘を得たことが明瞭である。従って授業の面でも、もっと多くしてほしかったとする傾向が全体的に認められる(別表6の(3))けれども、逆に「してほしくない」とする傾向が1学級を除き学年を追って強くなってきているのは注意すべきであろう。この点に関し教官側の回答中に教生の学力不足を示したものがあり、実習日誌の中にも基礎学力やその応用力の不足を指摘されたものまたはそれを思わせる記載が相当に見受けられるので、学力不足は上述の理由の1つに考えられるのではないだろうか。「授業から得る所がない」とする傾向は学年進行に伴って強くなっているのは、別表6の(4)から裏付けられる。もしそうだとするならば僅かの授業時数しかなかったにもかかわらず、かかる傾向が見られる所に、教生と共にわれわれ自身としても十分に思いを廻らさなければならないであろう。文化祭については期間中にあったことを「よし」とする学級が多い(別表6の(5))。しかし相談に乗ってくれたと生徒が考える率は学級によって差がある(別表6の(6))。これは立案に参加する時期が教生にとって研究に最も追いこまれていた時であり、また立案は生徒自身の手によったためであるかも知れない。しかし準備の段階に入ると教生がよく参加していることが別表6の(7)から理解^{注8}される。

教生の研究については、今回の研究だけで手際よく1つにまとめあげられたもの、大きな問題の1部分となるような性格のもの、又はその中間的な性格を示すものなどいろいろなタイプがある。何れも学説の現場的証明のものではなく、グループの生々しい問題意識から現実的問題を選び出し、自分たちの問題、学級の問題として解決しようとする方向に進んでいる。その解決をほぼ達したものもあるし十分には行なわれなかったものもある。何れにもせよ、生きた問題を扱い生

きた資料を利用し考察を加えて結論に導いた態度は認められてよいし、またいろいろな意味で将来の参考になればと念じている。

Ⅲ ま と め

以上が今回実施した教育実習の報告である。別表の数字も全般的に眺めたにすぎず、また著しい特徴を示した学級についての分析も省略した。

しかしこの実習で教生の得た所も少なくないようである。授業についての反省^{注9}を始めさまざまな成果^{注10}は、つらい事が多かっただけに印象強いのではないだろうか。

一方、学級中心で実施したことと研究テーマを課したことは理解されたとしても、授業・行事・オリエンテーションなどの具体的問題については今回の例を参考にして、徹底的に研究しなければならないことを痛感した。某教生の実習日誌の総合反省にいみじくも書かれた言葉を記して報告を終りたい。「私は今年度のこの方式に更に改正を加えられれば、生徒にとっても学校にとっても学部にとっても、大いにうるところがあると思う。」

注1 徳島大学学芸学部附属中学校編「全国の附属中学校において教育実習はどのようにおこなわれているか」——教育実習をよりよくするために——(1961年)

注2 実習期間中に研究課題を与えこれを報告して提出させるのは、36年度から始めた。

注3 36年度某教生の実習日誌の1節

「どんな働らきかけをすれば同じ1つの知識でも最良に受けとられるであろうかと言う課題を位置づけなければならぬと考えた」「現場で考える時間を与えられたのだ。大学で与えられたことよりももっと有効であったかも知れない」「クラスと言う学校の基本的集合体の中へ入り込むことになった。とにかく無責任な気分ではいられないことを強く感じた」

注4 東北大学教育教養部「教育実習指導書」昭和30年度、全国附属学校連盟「教育実習の手引」

注5 某グループは夜間そのグループの教生の自宅に集まり遅くまで研究計画について討議したことが実習日誌に見えている。

注6 第3日目、第6日目(臨時)第7日目。

注7 A教官「HR、教育学研究に重点がおかれて教授法や教科研究の方が手薄であった」

B教官「授業時数はもう少し多くした方がよい。学習を通して見た生徒の実態をつかむことが十分できなかった」

C教官「授業もやはり重視してやりたかったが残念であった」

注8 実習日誌に、コーラスを手伝った、又は劇のせりふを直したなどこれに類する記載が多く見うけられる。

注9 A教生の実習日誌

「私が今まではばく然として学校の授業と云うものに対して考えていたことを考え直さなければならなくなってきた。どう教えるか子供にどう考えさすかばかりが授業ではない事、学校生活の大半をしめる教科指導において何を生徒に教えるのか、学ばせるかがはっきりしないといけないことを痛感している。」

注10 B教生の実習日誌

「現場において教育実習を実践することにおいて、又テーマ研究をすることによって、現場の重要性を知ったと同時に又教育に対する関心が更に深まり、教育研究の出発点としての教育における問題意識を更に深くもつことができるようになった。」

別表1

研究テーマ例

A 学習指導

1. 成績不振児の指導について…中3 A又は中3 B
2. 学習効果を高めるために視聴覚教具をどのように利用したらよいか
3. 社会科単元指導計画の作製
4. 学級内での、学習上の問題点の分析
5. 学習過程の観察と分析

B 生活指導

6. HRにおける集団指導のあり方……高2 B
7. 学習意欲を高めるためのHR運営はいかにするか……高1 A
8. HRにおいて、読書指導をどのようにしたらよいか……中3 A
9. 道徳教育において図書館資料をどのように利用したらよいか……中3 A
10. HRのあり方はどうあるべきか—楽しい雰囲気・団結について—……中2 A
11. HRの組織上の問題点について
12. 教室管理を合理的かつ効果的にするための方途について
13. HRの効果的な運営に関する問題点について
14. 生徒会・生徒集会などにおけるリーダーシップの養成について
15. HR指導と個人別カウンセリングの有機的関連について

教育実習について報告

C 調査分析

- 16, 生徒の学習態度の分析……高2 A
- 17, 学年進行に伴う学習上の興味および性格の推移の分析……中3
- 18, 本校と市内の高校中学との生徒構成の比較検討
- 19, 集団構造の分析（友人関係を中心として）
- 20, 英語学習への興味と学習成績との関係
- 21, 知能指数と学習成績との関係
- 22, 本校生徒のクラブ活動の現況

D 図書館

- 23, 学校図書館の管理運営はどうあったらよいか…

中3 A

- 24, 図書館教育をどのようにしたらよいか

- 25, 学校図書館は新教育課程にどう対処したらよいか

- 26, 生徒の図書館利用の現況

E その他

- 27, 本校のカウンセリングの体制の現況

- 28, 創造的思考の育成はどのようにいわれているか

- 29, PTA学習はどのように行われているか

別表 2

昭和37年度教育学部学生教育実習計画案

日	曜	午 前	午 後	放 課
25	木	紹介 オリエンテーション 観察の説明、観察	観 察	グループテーマの選定
26	金	観 察	観 察	希望教科の提出
27	土	観察 担当教科決定 授業説明指導会（4限終了後）	研究計画(方法等)の検討……学部教官	
29	月	観 察	授 業	研究計画の提出
30	火	授 業	授 業	研究 (クラブ参加)
31	水	〃	テ ス ト (2 時 間) , 結果の処理	
1	木	〃	授 業	研究 (クラブ参加)
2	金	〃	授 業	〃
5	月	文 化 祭 参 加	研 究 (参 加) (資 料 収 集)	
6	火	文 化 祭 参 加		
7	水	研 究 発 表 会	総 合 反 省 会 リクリエーション	

別表 3

教育実習生研究テーマ

学級	教育 学科	心理 学科	研 究 テ ー マ
中1 A	0	4	英語学習への興味と学習成績との関係
中1 B	2	2	集団構造の分析（友人関係を中心として）
中2 A	1	3	H.R.のあり方はどうあるべきか — 楽しい雰囲気、団結について —
中2 B	4	0	H.R.の組織上の問題点について
中3 A	0	3	成績不振児の指導について
中3 B	1	2	H.R.の組織上の問題点について
高1 A	4	0	学習意欲を高めるためのH.R.運営はいかにあるべきか
高1 B	2	2	H.R.のまとまりはいかに指導したらよいか
高2 A	2	2	生徒の学習態度の分析
高2 B	2	1	本校の特性と生徒の関係

別表 4

全教官から見た反省の結果

内 容	よい	やや よい	普通	やや 悪い	悪い
1. H.R.中心に活動させたこと	6	6	4	0	1
2. テーマを選んで研究させたこと	7	6	3	0	1
3. 期間中に文化祭のあったこと	1	5	8	3	1
4. 文化祭に参加させたこと	1	5	10	0	1

別表 5

教生の立場からみた実習の結果

1. 今年度の方式について

特 別 研 究

内 容	よい	やや よい	普通	やや 悪い	悪い
1. H.R.に配属されたこと 自体	32	3			
2. H.R.テーマを決定する 方法	2	2	10	12	9
3. テーマ研究を課されたこ と	15	12	3	4	
4. テーマ例の内容	4	7	16	7	1
5. 教科の決定法	2	2	8	11	12
6. 授業時間の多少			7	14	14
7. 心理テストを課されたこ と	3		14	7	11

2. 教育実習の成果……略

3. その他

(1) 最も負担の大きかったもの

仕事が多方面すぎる	30
時間がない	26

勤 務	15
研 究	13
授 業	9
H.R.指導	3
グループの協力	2
そ の 他	0

(注 以上8項目から3つずつ選択させた)

(2) 最も力を入れた点

研 究	18
授 業	15
文化祭指導	14
H.R.指導	13
ク ラ ブ	0
そ の 他	13

(注以上6項目から2つずつ選択させたもの)

別 表 6

			中 学						高 校			
			1 A	1 B	2 A	2 B	3 A	3 B	1 A	1 B	2 A	2 B
(1)	ホームルームとして教生に 親しめましたか	大へん親しめた	19	*35	6	*5	18	*25	*41	22	30	1
		少し親しめた	7	4	34	4	14	9	5	16	7	1
		どちらでもない	15	3	7	13	7	7	3	9	7	7
		あまり親しめない	2	1	3	6	1	1	0	3	0	2
		全く親しめない	1	0	5	14	8	2	1	3	2	35
(2)	ホームルームの教生からう るところがありましたか	大へんあった	*10	14	*6	*4	7	6	*37	6	5	3
		少しあった	11	10	10	3	11	12	6	19	5	2
		何とも云えぬ	13	18	18	20	17	18	6	13	20	8
		中 間	6	1	8	5	1	4	0	7	3	4
		全く何にもない	3	0	8	10	8	5	2	9	13	29
(3)	教生にもっと多くの授業を してもらいたかったですか	大へんしてもらいた かった	22	30	17	*16	19	10	24	16	11	9
		少ししてもらいた かった	2	10	10	5	3	8	7	4	5	2
		何とも云えぬ	13	3	9	10	10	2	10	13	7	9
		少ししてもらいた くない	3	1	11	4	5	7	4	8	4	1
		全くしてもらいた くない	4	0	3	6	11	8	6	13	19	25
(4)	教生の授業からうるところ が多かったか	大へん多かった	10	7	3	5	8	*2	11	*4	3	0
		少 し あ っ た	14	15	12	6	8	9	15	11	2	5
		何とも云えぬ	13	17	21	19	16	18	12	18	15	10
		少 し な っ た	4	2	10	6	1	12	5	8	4	4
		全 く な っ た	2	1	4	4	14	3	7	12	22	27

教育実習について報告

(5)	教生の期間中に文化祭があったとはよかったですか	大へんよかった	*30	35	34	*24	*29	26	30	17	10	5
		少しよかった	3	2	5	1	3	11	8	13	6	4
		何とも云えぬ	8	3	7	10	6	2	8	11	10	21
		余りよくない	2	1	1	1	4	3	0	6	5	4
		全くよくない	0	3	3	5	5	3	5	7	15	12
(6)	文化祭の相談にはよくのってくれましたか	大へんよくのってくれた	*10	20	13	*7	12	19	36	*21	*8	0
		少しのってくれた	6	12	21	8	5	10	9	13	6	0
		何とも云えぬ	19	7	9	9	14	11	2	13	12	10
		余りのってくれない	5	4	2	8	7	4	3	4	5	0
		全くのってくれない	3	1	5	10	10	1	1	2	15	36
(7)	文化祭全体をよく手伝ってくれましたか	大へんよく手伝ってくれた	14	31	29	*9	27	22	28	*24	4	6
		少し手伝ってくれた	4	5	14	8	6	14	15	12	3	6
		何とも云えぬ	18	6	9	14	8	8	7	11	6	5
		少し手伝ってくれない	5	1	6	3	1	1	0	4	9	3
		全く手伝ってくれない	2	1	3	8	6	6	1	2	24	38

注 数字はすべて実数

(1)～(6)の*印はその学級に不記入のあることを示す。